



撮影・川崎公太

全日本柔道連盟審判副委員長に女性で初めて就任した

顔

山崎 立実さん 57

茶道は裏千家、謡曲は観世流をたしなむ京女が、試合場の畳に毅然と立つ。「謡は上手になれなかったけど、主審をすると『待て』の声がよく響くんです」。緊迫感を漂わせても、選手に注ぐ視線は温かい。

京都御所近くで父親が開いた「円心道場」で、3歳から柔道を始めた。「好き嫌いは関係ない。みんなやっていると思っていた」。陸上競技にも誘われたが、そのたびに連れ戻された。「父はどうしても柔道をしてほしかったみたい」。女子六段。学生時代から道場で指導もする。

勝ったと思った試合を負けと判定され、柔道をやめた子どもがいた。その際のやりきれなさからルールを猛勉強し、38歳で全日本柔道連盟の公認A級審判員に合格。2002年、国内で女性2人目の国際柔道連盟インターナショナル審判員になった。

「審判が印象に残らないほどいい試合」と思う。女性初の副委員長として判定に目を光らす一方、週2日は道場で子どもらと汗を流す。「町道場が枯れたら日本柔道は駄目になる」。一人でも多くの柔道家を育てる決意だ。

(運動部 杉元雅彦)